

ちょっと変わった家族

【あらまし】

理想的な家族のイメージを連想すると、「楽しい両親と明るい子供」が浮かぶかもしれない。しかし、そのような家族は少なくなっている。それに、子供たちが大きくなれば、「理想の家族のイメージ」は、大きく形を変えていく場合もある。ここで描かれている家族は、「理想の家族のイメージ」から少しずつ離れ始める。

父は単身赴任、姉は離婚し、オタク系の兄もいる。その中で暮らす筆者は、この家族が嫌で仕方がないが、筆者はそこにも家族としての「絆」を見つけ、微笑んでいる。理想的な普通の家族など、今の日本に存在しないのかもしれない。「家族」として生きる筆者の足跡を綴ったストーリー。

●小見出し

形を変えていく私の家族

暴力的な兄、現わる

姉の妊娠発覚

ゴミ屋敷に居座る兄

「もう全部ヤダ！」

姉の離婚と派遣切り

それでもかけがえのない私の家族

形を変えていく私の家族

現在、大学四年生。淡々と平凡な人生を歩んできたかと言えば、そうではないと思う。私が自分史に興味を抱いたのは、友人と家族の話をしていった時、「本にできるんじゃない?!」と言われたことがきっかけ。友人は冗談で言ったのかもしれないが、私は面白そうと思った。感動的で衝撃的なストーリーが私の自分史の中にあるかはよく分からないが、私にとって家族は、人生に大きな影響を与えてくれた存在。だから、私自身の人生と共に家族の人生を書きたいと思う。

我が家は、父、母、兄T、姉、兄N、そして私の六人家族。私たち兄弟が小さい頃はごく普通の平凡な家族だった。そんな家族の絆を繋げていたものは、年に一度の家族揃っての家族旅行だった気がする。しかし、兄弟が大きくなるにつれ、都合が合わなくなり、日に日に家族はバラバラになっていった。そして今でもう、普通の家族ではないと私は思う。

父は単身赴任、リビングには母一人、一つ目の部屋はヒステリックな住人が住むゴミ屋敷、二つ目の部屋にはオタク、三つ目の部屋にはシングル・マザーとそのお姫様、四つ目の部屋にはそんな家族に悩む「住人」、こんな家、想像できますか？

暴力的な兄、現わる

八歳。姉がバスケットをやっていたため、私も強制的に入部させられた。その頃、兄二人が恐ろしいほどの大喧嘩をして絶縁状態になった。一切、口を利かないどころか、おそらく、相手の存在を互いに無視していたんだらう。しかし、両親はどうすることもできず、ここから家族に亀裂が入り始めた。私は幼いながら、兄二人のせいで空気が悪くなるのがたまらなく、嫌で仕方がなかった。

兄Nは、小中学校で問題児だった。不良の仲間と遊ぶようになり、学校の授業をよく抜け出したりするなど、学校からよく電話がかかってきた。家でも凶暴で、よくキレては、家の物を壊していた。私も幼い頃から容赦なく本気で殴られていて、兄Nは、とっても恐ろしい存在だった。その頃、私は兄Nの顔によく似ていると周りに言われ、すごく嫌だった。同級生の男子に、私の色黒な肌や鋭く細い目、ニキビのできた肌のこと、よくからかわれ、よけいに自分の見た目を嫌った。そんな兄Nを何とかしようと、父が動いた。父の趣味である気球の手伝いをしに、男二人で旅行に行った。きつとそこで兄Nと父は、向き合って話をしたんだらう。兄Nが少しマシになって帰ってきた。父も今まで頼りない存在だと、嫌っていたけど、そう思わなくなった。

姉の妊娠発覚

十四歳。部活で暴言暴力の愛のムチを受けながらも、バスケットを楽しんでいた頃、姉がよく家出するようになった。当時、姉と同じ部屋だったため、部屋に行くこと「さっきまでいた姉がいらない！」と、いつも、突然のことだった。この時、姉は短大に行き始めたばかりで、最初は友達と遊びほうけているだけだと思っていた。

しかし、その半年後、短大から家に一本の電話がかかってきた。どうやら、姉は全く学校に来てないらしく、学校に行くフリをしてさぼっていたのだ。それが発覚したのは、親が後期の授業料を払った後のことだった。ただでさえ我が家の経済状態は良くないのに、多額の授業料を払っている親に迷惑をかけ、しまいには夢をあっけなく諦めてしまった。姉は保育士になることが小さい頃からの夢で、たいして夢のない私にとっては羨ましいことだった。姉は兄弟のなかで唯一頼っていた存在だったのに、私は幻滅した。

その頃、父が単身赴任することになった。周りに父親が単身赴任している友人も結構いたが、当時の状況で、父親がいなくなるのは辛かった。兄弟同士の心はバラバラで、そんな子供たちを母は一人で面倒見なければならぬし、「こんなんじゃない、家族がもっとバラバラになってしまおう」と思った私は、だんだん家族の在り方に、疑問を感じていた。

「家族って、なに？」

姉は短大を退学した後働いていたが、今までと変わらず、家出癖はなおらなかった。初めは、驚いて大慌てで、母も怒っていたが、その頃には慣れた日常の出来事となっていた。連絡が取れないのも日常。姉はとうやら彼氏ができたらしく、その人の家によく行っていたようだ。しかも、ネット上で知り合った東京の人というのとはとても驚いた。今の時代はミクシーなどで知り合い、そこからカップルになる話はよく聞くし。実際に私の友達にもいるから軽蔑する気持ちはない。

しかし、「ネットの繋がりがりなんて…」と当時は理解できず、姉を軽蔑していた。

そんな我が家の状況の中、少し救われたことは、兄Nがまじめになり、定時制に行くことを決め、夕方まで働き、その後学校という日々を送っていた。その後、兄Nは自分の好きなゲーム関係の仕事に就き、今までと違う生活にどんどん馴染んでいった。恐怖の存在だった兄Nは日に日に変わり、性格が丸くなった。しかし、我が家にまた悲惨な出来事はやってきた。

十五歳。ある日母と買い物から帰ってくると、いつものように姉がいなくなっていた。「またかよ」なんて言った途端に、リビングにいる母が私を呼んだ。

「お姉ちゃん、妊娠してるって…」

「え…？」

ダイニングテーブルの上に、姉から母に宛てた手紙が置いてあった。そこに、妊娠していることと、謝罪の文章が書いてあった。驚きすぎて、私はただ呆然とするしかなかった。母はすぐに姉に電話したが、いつもの如く繋がらない。数十分後、ようやく繋がり、すぐに帰ってくるように言った。

姉の彼氏はまだ大学生だった。そのため中絶も考えたが、医師から、中絶すると母体が危険な時期に差し掛かっているとわれ、出産の道しか残されていないかった。母は父を赴任先から呼び出し、姉と三人で東京へ向かった。普通なら彼氏の男がこつちに来て謝罪するのが当たり前だと思うのに、どうやら彼氏の男も両親も、そんな考えのない人たちだった。最悪。

そして、七月七日、二人は入籍した。式は挙げず、両家の家族だけで食事会をし、その後東京へ嫁いでいった。「地味婚だなんて…」私は、姉の結婚式に出て祝いするのが、一つの夢だった。幻滅することはあっても、それでも兄弟の中では一番頼っていたし、「兄弟の結婚式ってどんな気持ちなんだろう」とワクワクする夢だったのに。

姉と二人で使っていた部屋は、なんだか広く感じた。一人部屋に憧れていた私にとって、ちょうど良かったと思ったが、少し寂しくなった。

この頃、兄Tは、就職活動と大学卒業に苦戦してい

た。内定はもらったが、規定の時期までに卒業論文が終わらず、卒業式に出席できなかった。今思えば、このことが、後のヒステリックな兄Tを作ったのかもしれない。

ゴミ屋敷に居座る兄

十六歳。私は通学に一時間半以上かかる遠い高校に入学した。通学は大変だったが自分の第一希望の学校だったし、大好きなバスケットも続け、充実した毎日を送っていた。そんな中、またもや我が家に悲劇はやってきた。

ある雨の日、母は不在で、私は学校が休みで家について、すると、兄Tがずぶ濡れになって帰ってきて、「なんで母さんおらんねん！」と私にもすごい勢いで怒鳴り散らした。台所にあった皿を投げ割り、壁を蹴って穴を開け、自分の部屋に行ってしまった。あまりの衝撃と恐怖で、私はしばらく硬直していた。

兄Tはまじめな性格だが、決して人当たりが悪い性格ではない。スポーツマンで、小さい頃よく一緒にゲームを仲良くした、良い兄だった。

「そんな兄Tがなぜ？」

物静かで気難しい神経質な性格。まるで最近のニュースの殺人者でよく耳にするようなタイプの人で、このヒステリックさが怖すぎて、「いつか殺されるんじゃない

ないか」と母と怯えていた。

さらにある日、兄Tは不在で、開いていたドアから部屋を覗いてみると、床が見えないくらい、物が山積みになっていて、そこら中にゴミが散らかり、カーテンも閉め切って、さらには異臭が漂っていた。綺麗好きだったはずの兄Tの部屋は、ごみ屋敷と化していたのだ。「こんな人、兄でも家族でもない」と私は思った。

その後も、兄Tの状態は悪化する一方だった。夕食は一切一緒に食わず、仕事から帰ってきて、いつも自分の部屋にこもりつきりだった。たまに廊下ですれ違ふと、臭かった。就職したら家に毎月入金すると言っていた約束も、初めの半年ほどで終わった。「この人はただの同居人」と思って、兄Tのことで悩むのをやめた。

同じ頃、兄Nが変なキャラクターがプリントされたTシャツを着ていた。初めはセンスがないだけと思っていたら、部屋を見ると、アニメの女の子のキャラクターのポスターが貼ってあった。まさかとは思ったが、アニメ・オタクになっていたので。小中学は問題児、その後まじめになったと思っていたら、アニメ・オタクだなんて……。正直、どん引きした。日に日にポスターの数は増え、可愛らしいフィギュアも増えていく。本棚には、漫画やアニメ・オタク関係の雑誌、引き出しには大量のCDとDVDが入っていた。

母はおもしろがって話を聞くと、どうやら声優が好きらしく、好きな声優が声を担当しているアニメも好きらしい。当時「電車男」というアニメ好きな、アキバ・オタクが主人公のテレビドラマがやっていたが、私は見ながら苦笑していた。

兄Nは、ズボンにシャツを入れて、眼鏡をしてリュックを背負う、アキバ・オタクを象徴するスタイルではなく、Tシャツはアニ・キャラが描いてあっても、シャツはズボンに入れないし、眼鏡もしていない。見た目は本当に普通の人。ちゃんと働いているし、まだ人としてはマシだった。母はそんな兄Nを受け入れ、声優が音楽番組に出ていると、「あの番組に○○出てたよ♪」と、楽しそうに話していたが、私はやはりオタクには抵抗があり、なかなか受け入れられなかった。もちろん、友達にも言えなかった。

「もう全部ヤダ！」

十七歳。私は、通学時間が一時間半以上かかる中、部活の朝練があり、五時半の電車に乗って登校していた。部活で帰りも遅く、毎日クタクタで勉強もままならない生活。私は学校に通うのがしんどくなっていた。大学進学を目指していて、進学クラスでの勉強も忙しかった。また、部活のチームは県大会ベスト三位に毎回入る、強豪校だったため練習も厳しく、上手な学生

が沢山いた。

それに比べて、私はただバスケットが好きで、長年やってきたから、それなりにできただけだった。入部当初は中学時代より遥かに成長し、さらに自分の得意プレーを見つけ、監督によく褒められ期待されていた。

しかし、高二になってスランプに陥り、できない自分に対して日を増すごとに苛立ち、あんなに好きだったバスケットが嫌になった。勉強もついていくのがやつとで、成績も悪く、時には赤点を取っていた。バスケもダメ、勉強もダメ、私は目標を失い学校を辞めたくなった。朝練も行かず、毎日遅刻していた。それでも部活は辞められなかった。

私の学年は、初め十人いた部員が、既に私を含め三人になり、辞めたら、他の二人から「裏切り者」と思われる気がした。さらに、バスケを辞めて監督の目を気にして過ごすくらいなら、「学校を辞める！」と思ってしまうほど追い込まれていた。

一方我が家では、毎日のように、母からの家族や職場での愚痴の聞き役をしていて、その積み重なった想いが爆発しそうだった。初めは母の愚痴を黙って聞いていたが、学校での事も重なって、ウジウジ言っているだけの母に、一層腹が立った。

そんなある日、私はたまたまらず学校を休んだ。母がいつものように叩き起こしに部屋に来たが、「行きたくない

い！もう全部ヤダ！」と泣き叫んだ。すると母も涙を流した。今まで母が泣いた姿なんて見たことがなかった。その母の涙を見て、兄Tはあんな状況。姉は東京に嫁いだきり、年に一度しか帰ってこないし、相変わらず連絡も取れない。そして私はこんなワガママを言い出し、母も積み重なる想いが溜まりに溜まっていたんだ、と初めて気づいた。

一家の大黒柱である父は単身赴任で、家の事は全て母がしなければならぬ。その追い込まれた気持ちに、私はこの日ようやく気づいた。申し訳ない気持ちで、よけいに泣けてきた。

その日は、結局学校を休んだが、これ以上母に迷惑をかけまいと、その日以来、学校も部活も休まず頑張つて通った。しかし、私の心の闇は消えず、学校で元気な姿は消えた。監督はそんな私の異変に気づき、ある日呼び出された。監督にこれまで全てのことを話すと、自然と涙が出てきた。自分のダメさと、みんなに迷惑をかけた反省の思いが込み上げてきた。監督は、普段とても厳しく、怖い人なのに、何も言わず私の話を聞いてくれた。

「頑張らなきゃいけないけど、頑張りすぎたらダメ。焦らず、自分のペースでやればいい。それに、嫌な気持ちも貯めこむな。お前には友達も仲間もおる」と言ってくれた。そんな些細な言葉だけど、すごく励まされ

れ、前向きな気持ちになれた。

十八歳。高三になり、インターハイ予選が終わってから、私はプレイヤーからマネージャーに変わった。受験が控えているため、勉強に力を入れたいからという理由だけでなく、最後のインターハイ予選で、悔いのないプレーをしたから。周りの選手からしたら、へなちよこだったかもしれない。でも、十二年間分の力をありつたけ出し切った。

一方で同じ頃、兄Nがスピード違反で捕まり、運転できなくなつた。車がないと通勤できないため、兄Nは一人暮らしをすることになった。ただそれだけの話だが、我が家は母、ヒステリックな兄Tと私の三人暮らしになった。六人家族が半分になった悲しみと同時に、家族の絆など壊れかけていた自分の家族が、これで、本当にバラバラになったんだと感じた。

姉の離婚と派遣切り

十九歳。私は大学受験に失敗し、専門学校に行くことになった。しかし、大学は諦めず、三年次編入するためにここで二年間頑張ることにした。そこで、私を変えらる人物に出会った。その友人Mは、とても気さくでおしゃべりで明るく、人気者だった。その子とすぐに友達になると、日に日に私までよくしゃべるようになっていた。元々私は明るいが、人見知り友達以外

の子とは上手く話せない内気な面もあった。しかし、友人Mに出会ってから、人と話すのが好きになり、社交的な性格に変わった。ただ友達になったただけだが、Mには本当に感謝している。

その同じ頃、姉から一通のメールが届いた。

「その内、母さんに話あるから、電話する」

わざわざ姉が電話をしてくるなんて珍しすぎる。私はなんだか嫌な予感がした。

離婚。姉はシングル・マザーになった。結婚した頃、姉の旦那は大学生で卒業前に単位が足らず、退学したそう。話によると、学費は彼の祖父が払ってくれていたらしく、大学に進学できたのも、祖父が両親を説得してくれたからだという。「そのおじいちゃんのためにも頑張つて卒業するべきなのに退学だなんて」と、私は幻滅した。

さらに、退学してからきちんと親として就職するべきなのに、正社員でなく、ずっとパートとして働いていたらしい。訳が分からない。挙句の果てに、金銭面で言い合いになり、別居し、離婚にいたった。

しかも、姉は意地を張ったのか、「養育費も慰謝料もいらない！」と言ったらしく、姉に対しても理解ができなかった。まさか自分の姉ができちゃった結婚をし、数年後に離婚してシングル・マザーになるだなんて、もちろん想像していなかった私は、ショックとしか言

いようがなかった。七夕に入籍した二人。私はこれをきっかけに七夕の日は嫌いになった。

二十歳。私は家族を気にすることなく、バイトと趣味と遊びで毎日楽しんでた。さらには留学もして、自分の人生を充実させていた。資格取得も頑張った。そして大学編入の試験が近付き、私はA大学を選んだ。女子大は今まで考えていなかったが、調べていてA大学にとっても魅力を感じた。そして二年間、女子まみれのところに飛び込むのも面白いかもと思い、A大学を受験した。

二十一歳。無事編入学し、サークルに入って、合コンをしたり、と憧れのキャンパス・ライフとは実際ちよつと違うけど、それなりに楽しんでた。大阪や京都に一人旅もするようになった。バイトや遊びで帰りが遅くなることもあり、家で夕食を食べないことも頻繁になった。そんな時、母は一人で夕食を食べていた。たまに、家族の事で母に愚痴られては、ウザったく思っていた。しかし今では、母はどれだけ寂しかったんだらうと、申し訳なかったと思っている。

そんな時、我が家に再び悲劇が起こった。世間は不況。ニュースで派遣切りの話をしていて、姉も派遣社員だったため、人ごとは思えなかった。そんな心配していた矢先、

「仕事なくなつた。どうしよう」それだけ書いてあつ

た姉のブログを見て、すぐに連絡した。姉は、「親に迷惑かけてばかりでこのまま実家になんか帰れない」

と言つて意地を張っていたが、私は、「帰ってきてほしい。お母さん、寂しがってるし、お互い支え合っていけばいいじゃん！ こういう時に、甘えないでどうすんの！」と説得し続け、姉はようやく母に連絡した。

派遣社員でシングル・マザーの姉は、食べてくだけがやつとで、お金なんてなかった。母は貯金を少しもしてない姉を叱つたが、引越し費用を出し、姉は娘を連れて、我が家に出戻ってきた。正直、姉に帰ってきてほしかった本当の理由はいくつかある。母の愚痴を一人で聞くのが、もううんざりだった。それに私の帰りが遅いと、母は一人でご飯を食べたことを、いつも嫌みのように言ってくることも、もう嫌だった。母の悲しみと、私のストレスのためにも、そして姉と姪が安心して暮らせるためにも、姉が帰ってくるのが一番いいと思つた。

それでもかけがえない私の家族

現在。姪はかなりワガママで手に負えないくらい暴れん坊。初めは、「この暮らしがいつまで続くんだ…」と気分が落ち込みそうだったけど、今は慣れた。そして何より、暗くなつてた我が家も賑やかになり、母も相変わらず大変そうだが、以前より数十倍楽しそう

に毎日を送っている。それを見て私もほっとしているし、私も家で笑っていることが多くなった。

だからと言って、まだまだ問題はある。実家に戻り、楽な生活になってからグータラな性格になった姉は、仕事から帰ってくると、ソファアに座ったまんま、家事は母に任せつきり。挙句の果てに、姪の送り迎えも六割は母がしている。最近は何より数倍素敵な彼氏もでき、姪を残し外出することもあり、母に甘えっぱなしだ。度が過ぎる。このストレスで私は胃を痛めることもあるけど、以前の生活を送るより、ずっとマシ。「この人達のおかげで、家庭が明るくなったんだもん。帰ってきてくれて、ありがとう」と思う。

父はまだ単身赴任中、兄Nも一人暮らし。兄Tは、父が面と向かって話をしてくれたことで、以前より話すようになった。ご飯以外は自分の部屋にいることは変わらないが、一緒に外食も行くようになった。新しいパソコンを買った時には、兄Tは電化製品に詳しいため、設定もしてくれた。相変わらずヒステリックで謎な部分もあるけど、前よりマシになった。「本当は、もっとコミュニケーション取りたい」これは私の今後の課題。

やっぱり家族は笑っていてほしい。家族は私の原点であり、私の帰る場所はやっぱりここしかないから、よけいにそう思う。帰ってきてほっとできる場所であ

ってほしい。最近思うことは、私の一番の願いは家族が幸せでいること。「もう家族なんて嫌！」って思うこともたくさんあるけど、結局、家族の幸せが私の一番の幸せ。もしかしたら、綺麗事だと思われるかもしれない。幸せそうで、楽しそうな仲がいい家族を見ると、すごく羨ましく思ったこともあった。「本当に何よりも、自分の帰ってくる場所が、あったかかって究極の幸せだ」と思う。

単身赴任の父、みんなに振り回される母、オタクの兄、ヒステリックなもう一人の兄、できっちゃった婚の後シングル・マザーの姉、度が過ぎる暴れん坊な姪と、マイペースな私。「変わった家族だけど、個性があって面白いじゃん！」って今なら言える。まだまだ悩み事は多いけど、いつかまた家族全員が一緒に空間で楽しく笑い合って「絆」を感じたいと、私は夢みる。私にとって、家族はやっぱりかけがえないもの。